



中国の目覚め

清華大学 野村総研中国研究センター理事・副センター長
松野 豊

北京で暮らしていると、中国という国家の変化を日々実感できる。ここでいう「変化」とは、大都市に次々と出現する近代的施設のことではなく、また国内総生産（GDP）が世界何位かといった外形的なことでもない。筆者が最近ひしひしと感じるのは、中国のいわゆる知識人の「国際感覚」の変化だ。ただし「国際感覚が鋭くなった」というようなことでもない。

2008年の世界的な金融危機は、中国にも大きな影響を与えた。それまで自らを「発展途上国」だと称していた中国に対して、世界各国が一定以上の役割を求めてきたことは、中国を少々狼狽させた。そして09年は、貯め込んだ国家の蓄積を放出して巨大な内需投資を行い、ある意味で強引に8%台のGDP成長を果たした。

中国当局も、こうしたやり方が長くは続かないことを理解しているだろう。しかし、結果的に09年は、中国が世界経済に大きな影響力を与え

られる存在になっていくことを確信させる年にもなった。そしてそのことは、中国の知識層の思考方式に大きな変化をもたらしたためである。

最近、中国の大学生の海外留学志向に陰りが見え、また人気の就職先は今や外資系企業ではなく、巨大な国有企業なのだそうだ。中国の知識人の意識は、確実に変化してきている。これまで懸命に海外の先進モデルを取り入れようしていた意欲が鈍り始め、最近では「もう海外に学ぶものはなく、中国は中国の道を行く」と豪語する知識人すら出てきた。

筆者は、中国人の国際感覚が成熟途上にあるままで大国化していくことを強く危惧する。これは、中国経済が急速に膨張し、海外から盛んに「褒め殺し」をされるために起こっている一種の悲劇だと思う。

時を一新して、最近「中国モデル」の研究が盛んになってきた。ちよつと前までは、この種の論文は単純なナシヨナリズムに基づくものにすぎなかった。しかしここ数年、真剣に

中国の発展を「中国模式（中国モデル）」としてとらえて研究した書物や論文が目立つようになっていく。それは、近年の改革・開放政策による「社会主義市場経済」の成功を、理論的に説明しようとするものだ。

もちろんこれらの理論は、これまでの共産党政権の功績を誇り金融危機で露呈した欧米型資本主義の限界を揶揄する、という意味で、歪曲された理論武装に突き進んでしまう危険をはらんでいる。しかし、それでも新たな国家モデル、経済モデルとして、研究に値することも確かだろう。

中国は08年の北京五輪の「成功」で自信を深めたといわれるが、筆者はむしろ08年の金融危機で「自国に目覚めた」ことに注目したい。ここ数年の中国人の意識変化は、とても大きな変化であった、と後世に記されるかもしれない。ただし、この意識変化が中国経済や世界経済の「危険な予兆」だった、ということにはならないでほしい。